

## 第3章 展示計画

～展示を通してどのように伝え、どう活動に展開するか～

## 1. 展示の基本方針と展示ストーリー

“展示”と“語り部”が融合して市民参加で後世に継承する展示事業とし  
生の声や思い、そして市民の記憶・記録を通して、  
「震災」と「防災・減災」の教訓を後世に、そして世界に伝えていく

事業方針では、「震災の記憶と教訓を未来につなぐ学びの場をつくります」を基本方針のひとつとして掲げています。この基本方針にもあるように、あの日の震災を経て経験したことに、「防災・減災」というテーマを加えることで、あの日の教訓を活かし、これからの災害に備え未来に継承する展示を目指します。

さらに、展示と語り部を融合させることで、臨場感豊かな生の声で感じながら、「震災」と「防災・減災」という2つのテーマにまつわる記録・記憶を体感しながら学ぶことができる場を創出します。

## 中核拠点施設

# 展示

必要な展示ゾーン(テーマ)を  
効果的な順番で辿る

### 1. “あの日から” を振り返る

東日本大震災と防災

### 2-①. “経験”を 後世に遺す

震災の記録と記憶の保存・継承



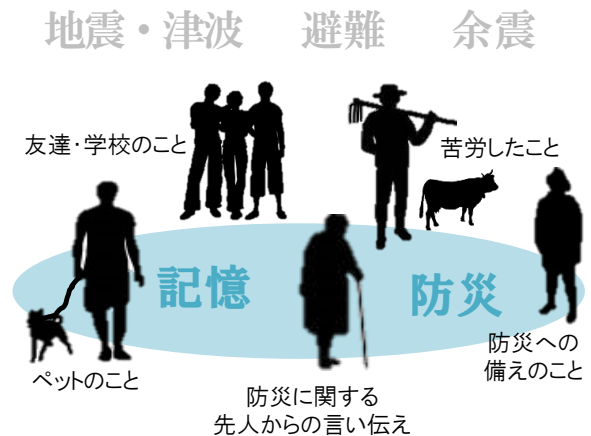
### 2-②. “もしも”と“対処”を 体験する

防災・減災の知識と意識の醸成



# 語り部 など

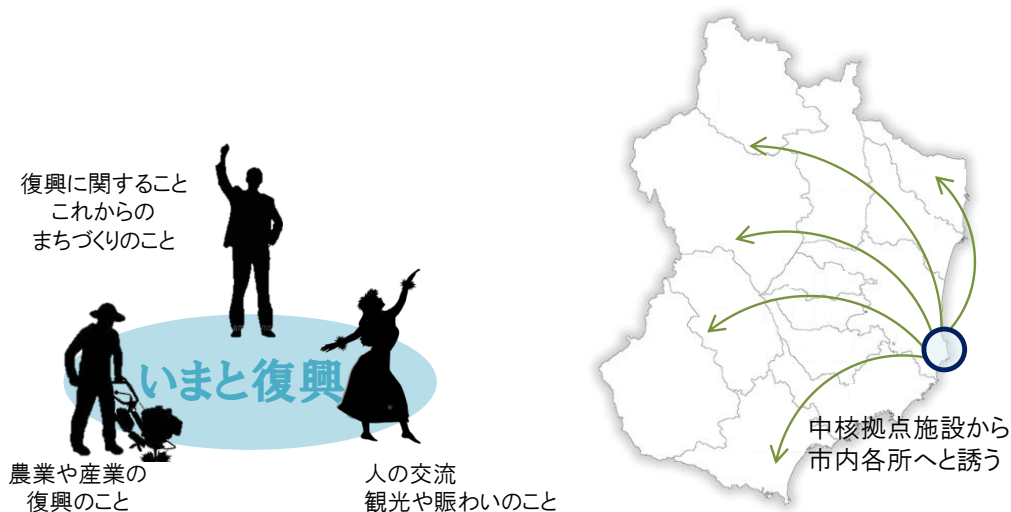
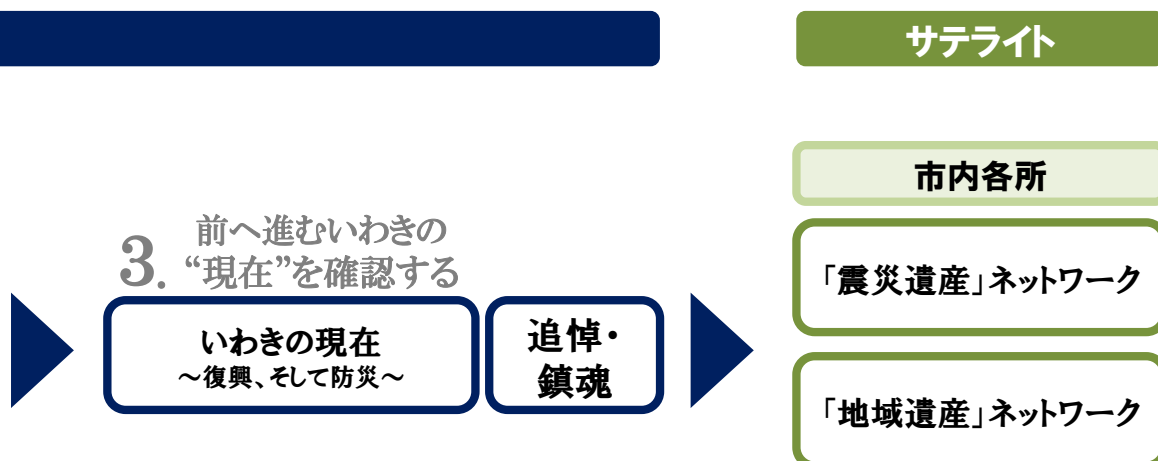
みんなに、それぞれの  
思い出や記憶を話してほしい



(1) 展示ストーリーの特徴

各テーマを効果的に伝え、展示全体を一貫したストーリーで見せることで、理解や感動を深めることができます。展示ストーリーとして5つの特徴があります。

- ①全体のガイダンスとして、震災と防災の関係を伝え、“あの日から”を振り返る。
- ②2011年3月11日14時46分以降、時系列に経験した順で、「震災」と「防災」を辿る。
- ③時系列に震災や防災を体験した後に、復興の進む現在のいわきに出会う。
- ④追悼・鎮魂は、展示を通して震災・防災を振り返った後に出会う。
- ⑤「いわきの現在」を確認したのちに、市内各所の「震災遺産」ネットワークや「地域遺産」ネットワークなど、サテライトへと誘うストーリーとする。

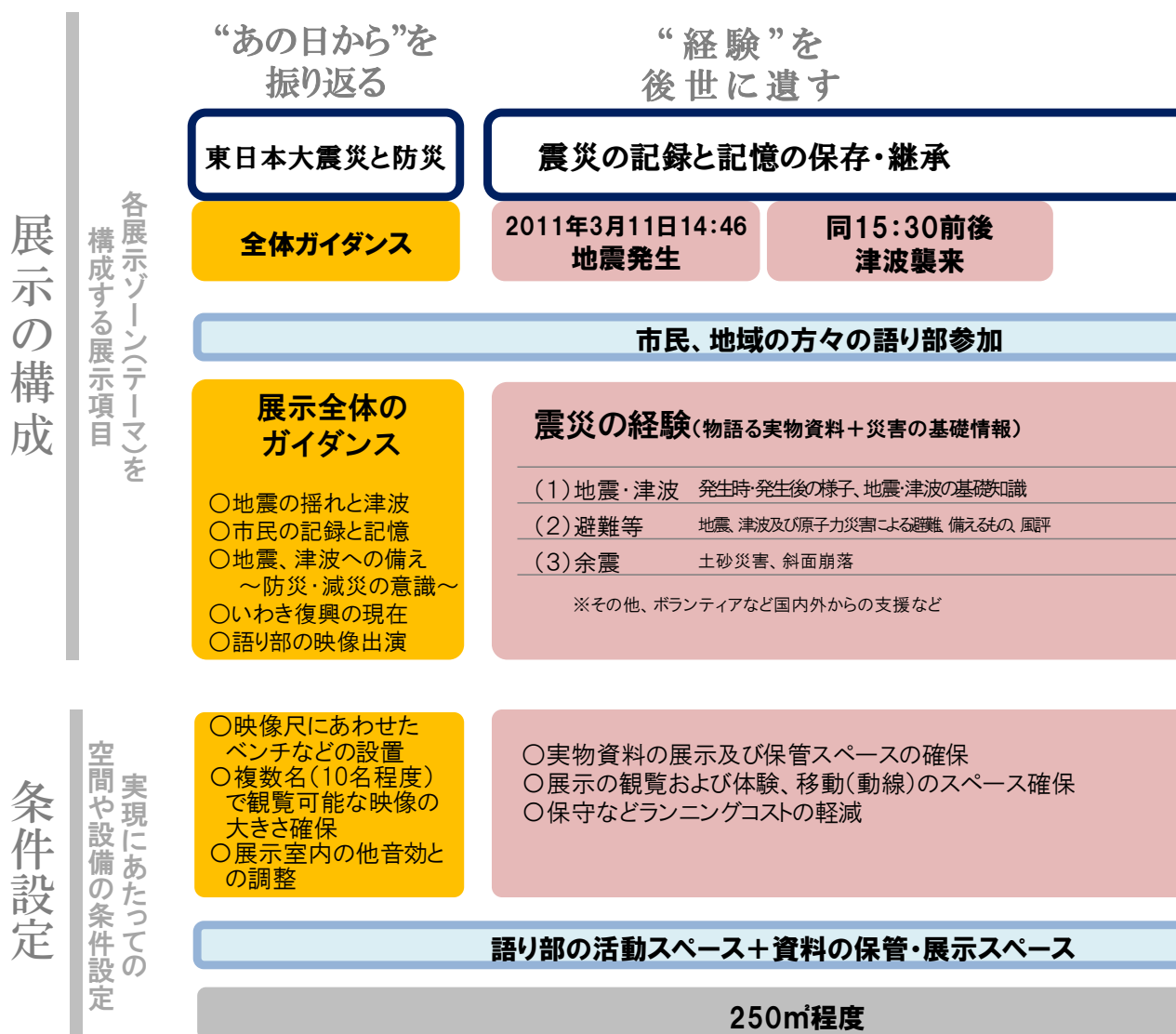


## 2. 各ゾーンの展示構成

### 展示構成を検討し伝える内容を整理 必要な機能や空間、設備与件を抽出

展示構成は、各ゾーンで伝えたいこと、体験してほしいことを一覽的に確認することができるとともに、空間や必要設備の与件、運営人員などの条件設定を検討・整理するうえでも非常に有効となります。

今回の展示計画では、「東日本大震災と防災」「震災の記録と記憶の保存・継承＋防災・減災の知識と意識の醸成」「いわきの現在」「追悼・鎮魂」という4つのゾーンについて、その構成内容を抽出します。



■各ゾーンの構成

(1)東日本大震災と防災

展示全体のガイダンスとして位置づけ、映像等で来館者の展示への興味を喚起しあの日からのいわきを振り返る場とします。

(2)震災の記録と記憶の保存・継承＋防災・減災の知識と意識の醸成

「地震・津波」「避難等」「余震」という、いわきでの東日本大震災を語るうえでポイントとなる3つのテーマを、時間軸に沿って辿ります。それぞれの内容に、「震災」を振り返り、「防災・減災」に関係する内容を体感できる構成とします。

(3)いわきの現在 ～復興、そして防災～

現在進行形で進む復興の様子、最新の情報など市全域に関する情報発信拠点と位置づけます。市民に勇気や希望を与え、市外から訪れた人々がいわきを応援したくなるようなきっかけの場所を創造します。

(4)追悼・鎮魂

亡くなった方への鎮魂と、震災を忘れないための追悼空間として、海への眺望を用意します。また、防災への気づきとして、防災緑地の紹介などを行います。

“もしも”と“対処”を  
体験する

前へ進むいわきの  
“現在”を確認する

防災・減災の知識と意識の醸成

いわきの現在  
～復興、そして防災～

追悼・鎮魂

避難、そして  
原子力災害

2011年4月11日  
内陸地震

復興への歩み  
いま、そして未来へ

追悼し未来に伝える

と 防災・減災体験 の融合

身近な場所での危険箇所確認＋備え初期対応体験  
避難所・避難先に持ち込むもの  
ハザードマップ

いわき全体の復興と  
成長する姿を紹介

- 復興の歩み・進捗
- 避難者の受け入れ
- 震災遺産・施設の紹介

追悼鎮魂。  
あの震災を忘れない

- 海への眺望  
・防災緑地  
・震源の方角  
・広大な海

- 防災・減災を自分ごと化して、学習の成果を持ち帰ってもらう学習の仕組みやツール(学習シート)の整備
- 情報の更新性や空間のフレキシビリティの確保

- 情報の更新性
- 最新情報の発信
- 震災遺産や施設の紹介

- 屋外でも可
- 防災緑地や復興の紹介  
など

100㎡程度

### 3. 展示空間の考え方

#### (1)ゾーニング・動線の考え方

#### あの日から現在までを壁面を沿って辿る構成で、これまでの経過を一望できる展示空間

展示ゾーニングは、建築の平面計画や今後の設計などとも大きく関わってきます。ここでは、後章の第4章に記載する建築計画にむけて、展示ゾーニングイメージ及び動線のひとつの案として提示を行います。

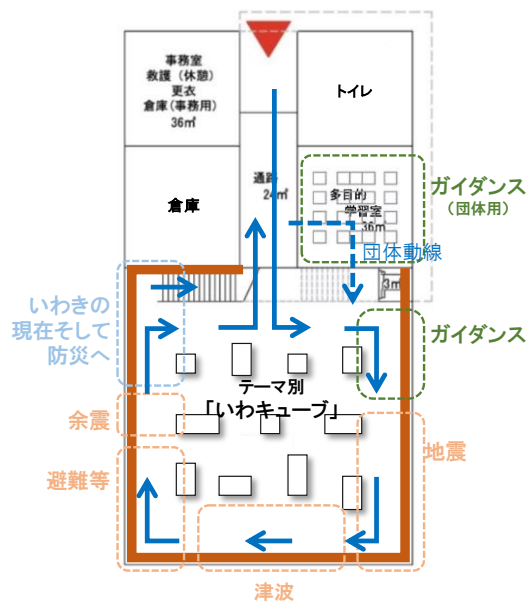
動線は展示ストーリーに基づき構成します。周辺の壁面に沿って、全体ガイダンスとともに、2011年3月11日14時46分から現在に至るまでの出来事を、時系列で追う構成とします。壁面の中には、当時の映像や写真、資料等の展示のほか、当時の思い出や言葉等を合わせて紹介することで、当時の記憶や市の最新状況を後世に、国内外にしっかりと伝えていきます。

また、展示室中央には、災害などの経験から得た知識を元とする、防災・減災に関する学びを詰め込んだテーマ別の体験・体感キット「いわキューブ」を配置します。「いわキューブ」は可動性を持たすことで、様々な展示室の利用にも対応していきます。

#### ■展示室イメージ



※あくまでもイメージです。デザイン等は今後検討を進めていきます



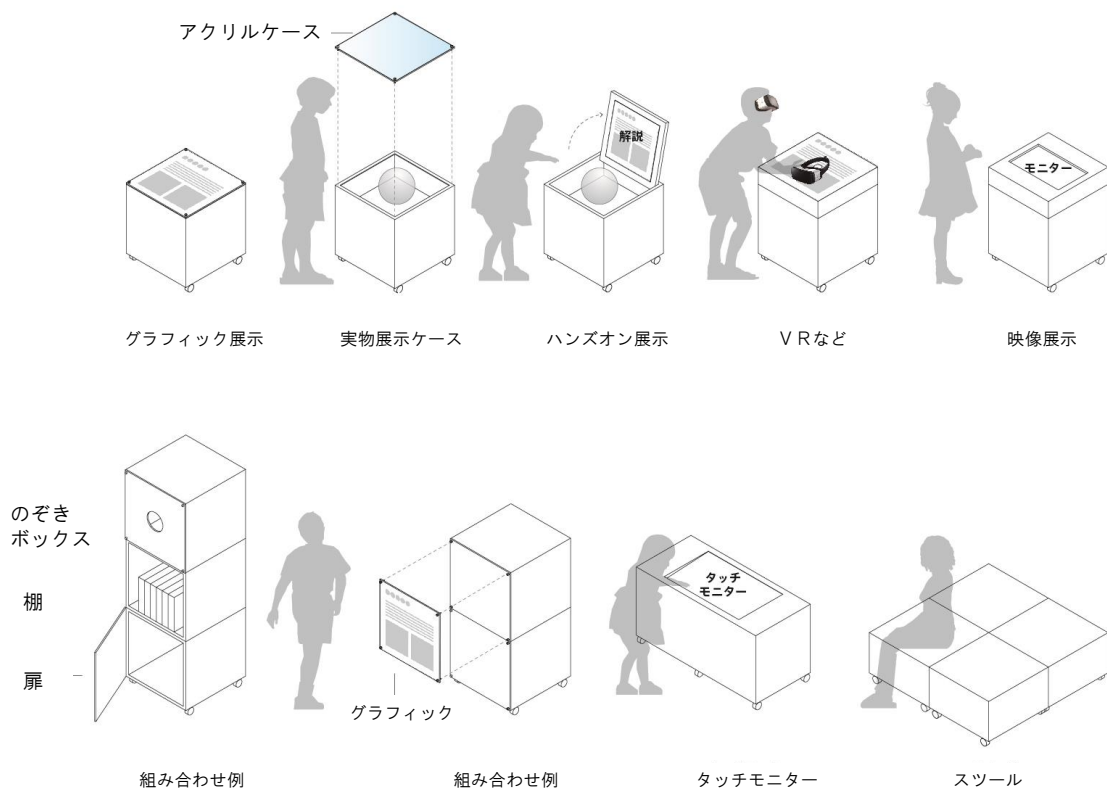
## (2) 防災・減災に関する可動式の体験・体感キット

### 防災・減災の知恵や教訓を体験・体感をキットとして詰め込んだ 様々な種類の「いわキューブ」を中央に配置

展示室中央に配置する可動式の体験・体感キット「いわキューブ」は、地震、津波、避難(所)、余震など、それぞれのテーマにあった防災・減災に関する知恵や教訓を学ぶことのできる体験・体感型の学習キットです。キットには映像、VR(バーチャルリアリティ)などによる映像コンテンツや、簡易な図上訓練などのボードシミュレーション、避難の際に持ち出す備品等の実物など、いわき市が震災を経験したからこそ得た教訓が詰まったキューブになります。

キューブは、可動式とすることで展示室内のレイアウト変更にも自由に対応可能となります。また館外への貸出などの事業も検討でき、学校での防災学習での利用も可能な仕様を検討します。可動である一方、万が一の地震発生時に備え転倒や振動による横移動に耐えるよう、アンカーでの固定などの方策も施していきます。

#### ■いわキューブ 展開イメージ



#### 4. 各ゾーンの展開イメージ (1)東日本大震災と防災

### 施設全体のイントロダクションとして映像で紹介

#### ①狙い

展示全体のイントロダクションとしての役割を果たします。いわき市がこれまで経験してきたこと、その中で得た教訓を語り継ぎながら、明るい未来へ向けて力強く歩もうとする人々の思いや姿勢に触れてもらうことで、この後の展示体験に対する興味・関心を喚起し、いっそうの理解を促します。

#### ②訴求内容

いわき市がこれまでに経験してきたこと、そしてその中から得た教訓を、震災や復興の当事者である市民の方々(語り部)の姿や声を中心としたドキュメンタリー映像で克明に紹介します。また、それぞれの語り部のメッセージの中からこれからの防災に生きる教訓をフォーカスして紹介していきます。

#### ③展開のポイント

ア)「語り部」が主役の映像構成！

語り部の姿や語りを中心に、ドキュメンタリータッチで映像を展開していきます。この後に巡る展示の各ゾーンで、語り部の言葉に興味を持ち、耳を傾けてもらうようしっかり印象づけます。

イ)展示全体のイントロダクションに！

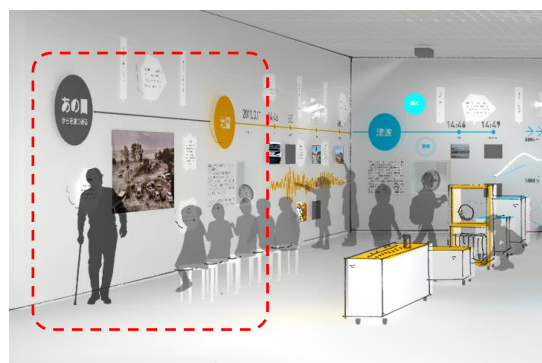
地元の方々の記憶にある印象的な光景、記憶を呼び覚ます遺留品などを映像の中に散りばめます。館内を巡りながらこれらを想起させる展示物と出会っていくことで、より印象深く記憶に残る体験を持ち帰ってもらいます。

ウ)いわきの力強さを発信！

過去を振り返るだけでなく、最新の情報や、未来の人々の防災・減災に貢献したいといういわきの力強い意志を感じとってもらいます。

#### ④スペック等

来館者層や全体観覧時間などを考え、映像尺は5～10分程度を想定します。映像は、当時の実写やCGなどを適宜活用するとともに、現在の姿は新撮することなどを検討することで、いわきの震災・防災・復興を臨場感豊かに伝えていきます。また団体対応時は、展示室横の多目的学習室で観覧できます。





(2) 震災の記録と記憶の保存・継承＋防災・減災の知識と意識の醸成

「地震・津波」「避難等」「余震」という3つのコーナーで  
いわきの震災・防災を学ぶ

①狙い

震災でいわき市がこれまでに経験してきたことを語り部のエピソードや実物展示によって克明な記録・記憶として伝えていきます。また、今回得られた教訓の紹介を行うことで、これからいつ起こるか分からない災害の被害を最小限とするために、地域の内外に貢献することを狙いとしています。

②訴求内容

いわき市が経験した、「地震・津波」「避難等」「余震」に関する災害(対応)での記録・資料とともに、防災・減災に関する「いわキューブ」の体験・体感キットを通して、災害への意識や防災・減災への知識へとつなげていきます。

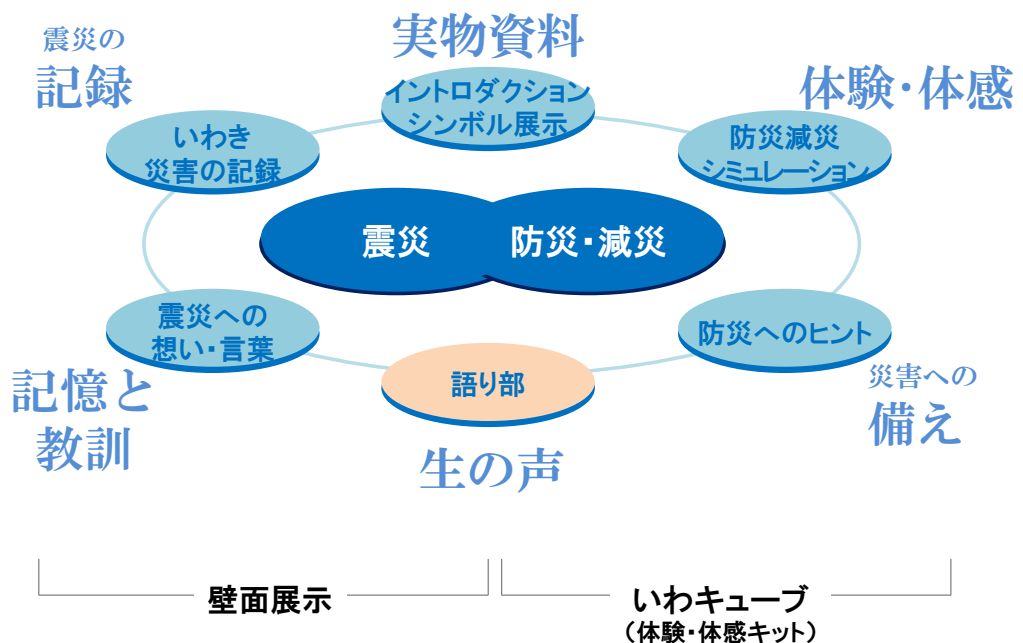
③展開のポイント

ア) 語り部の場所づくり

語り部の方々により、震災と防災のエピソードが語られるとともに、地域に昔から伝わる多様な「防災の知恵」にも触れる場を創出します。

イ) 各コーナーの構成要素

資料を見るだけでなく、語り部の方が経験したことを聞いたり、来館者自らが災害の教訓を疑似体験・体感したりしながら、震災の教訓を継承し、防災・減災意識の醸成につなげていきます。



#### ④各コーナーの構成要素 イメージ

##### <震災>

###### ア)イントロダクション・シンボル展示

震災を語る実物資料を展示し、震災(災害)の規模や被害状況を伝えます。

###### イ)災害の記録

いわき市での東日本大震災、複合災害に関する特徴や、各地区の情報、当時の記録写真、映像などを紹介します。

###### ウ)震災への想い

市民の災害別の記憶(映像や写真)等や言葉を蓄積します。また、施設供用開始後も情報の追加が可能です。

##### <防災・減災>

###### エ)防災減災シミュレーション

災害に遭遇した際に取りべき行動などをシミュレーションしたり、体感したりできる展示装置を設置します。体験者には、“ミッション”を用意し、それぞれの災害発生時にとるべき行動の確認や減災に向けて準備することなど、自分で行動し確かめる場、防災減災への意識を醸成する場とします。

###### オ)防災へのヒント

防災・減災に向けた日頃からの備えとしての防災備品などの実物や、来館者自らが手を動かし気づきや発見につながるハンズオン展示など、体験性の高い展示を導入していきます。

##### <交流>

###### カ)語り部

防災や震災に関する生の声を通して、実際に震災を経験し防災の重要性を感じた方々の知見や、教訓につながる内容を聞くことができます。

#### ⑤スペック等

語り部の活躍できる場所、また話を聞くために5～10名程度の団体が滞留できるスペースを用意します。

## (3)いわきの現在 ～復興、そして防災～

### 生き生きと躍動するいわき市の復興の最前線を訴求 追記更新性の高い情報発信拠点

## ①狙い

過去・現在・未来のいわきをつなげ、持続的にいわきの復興と成長を「見える化」する地域のシンボルとなる空間です。市民に勇気や希望を与え、市外から訪れた人々がいわきを応援したくなるようなきっかけの場所を創造します。

## ②訴求内容

震災直後と、現在のいわき市の姿を比較してもらいながら、ここに至るまでの復興の道のりとその成果を強く実感できる展示とします。

## ③構成要素～必要となる機能～

## ア)休憩・ライブラリ機能

遠方からの来館者の到着後の休憩や待ち合わせなど、くつろげる空間を用意します。また、いわき市の震災・復興・防災に関するライブラリも併設します。

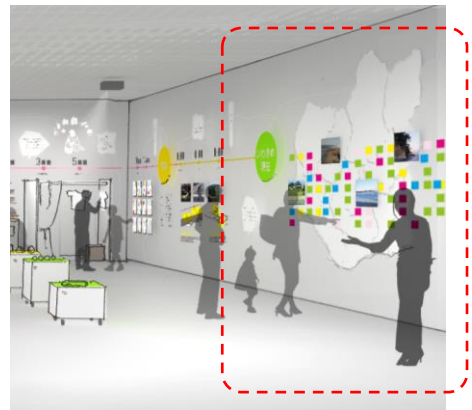
なお、壁面を使いながら、様々な企画展示やイベントなどに対応できるよう、フレキシブルな使い勝手に留意します。

## イ)情報発信機能 「いわき復興ビジョン」

市内各地で取り組まれている復興活動を紹介します。市民参加型の情報発信スペースとして、館に申請すれば誰でも復興に関する活動情報を、動画や静止画で紹介することができます。また、震災直後・復興途中・現在のいわき市を見比べることができる今昔比較の画像スライドショーのほか、市内の空間線量率や海水浴場の放射線に関する情報などを発信します。

## ウ)交流機能 「いわきVOICE」

現在のいわき市で頑張っている人を紹介。市民目線での復興に関する様々な取組や声を発信し、生き生きとした市の姿を形作る市民参加型の展示とします。



## 5. 施設での防災・減災教育を補完するツール

### 来館の記憶を帰途後の会話につなげる持ち帰りツールにより 防災・減災意識の深耕・拡大につなげる

学校教育での来館をメインに据える本施設においては、施設で体験したことや思い出を持ち帰ってもらい、家族や友人と話すきっかけとなることが、次の防災意識の掘り起こしにつながります。防災や減災への意識を深めるとともに、一人の来館者から家族や友人への理解の輪を広げることにより、市内への波及効果を高めていく方策を検討していきます。

#### (1) 展開例：持ち帰りツール「防災家族カード」

##### ① 狙い

展示から得られる様々な教訓をカード化し、館内各所に設置しておきます。

それらのカードは来館者に自由に持ち帰ってもらい、家庭で防災について考え、話し合うきっかけにでもあります。

##### ② 訴求内容

地震や津波が発生した際にとるべき行動を家族であらかじめ決めておくための質問をカード化します。

- ・ 連絡手段、待ち合わせ場所、逃げ方、ルート
- ・ 避難時の点検箇所、家庭内の防災の工夫 など

##### ③ 展開イメージ

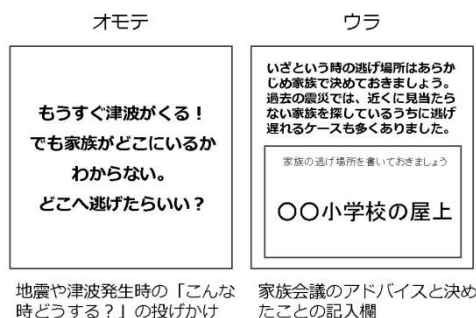
一枚のカードに対して一つのテーマ・トピックを扱います。

###### ア) オモテ面

いざという時の行動に関する投げかけをします。

###### イ) ウラ面

家族で話し合うべき内容のアドバイスや、家族で決めたことを記入しておく欄を用意しておきます。

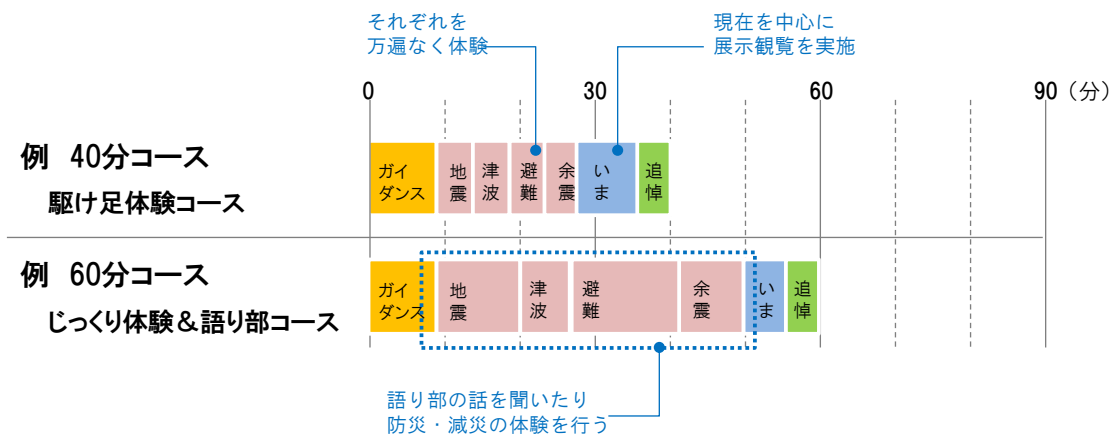


## 6. 展示体験時間(滞在時間)の考え方

### 複数の案内メニューを検討し、学習希望内容や滞在希望時間などに柔軟に対応

学校利用、企業や自治会などの団体訪問、観光来訪など、様々な目的をもつ方々が本施設に来館することが考えられます。それぞれの学びたい内容や前後の予定に伴う滞在希望時間なども様々であるため、複数の案内メニューを企画・開発する必要があります。

実施にあたっては、必要となる案内者や語り部の数・人員配置などを検討することで事業運営費の算出の参考にもなります。また学校など、団体での来館がある場合、どの程度の時間で、次の団体が入れるかを検討する材料にもなります。



## 7. 展示情報の更新性への工夫・配慮

### 常に最新情報を簡易に提供できる展示更新システムの開発

展示情報の更新性を確保し、展示事業を継続的に行うために、日々変化する復興の情報を、タイムリーに修正・更新できる仕組みの構築が必要となります。近年はデジタル技術、通信環境の進歩もあり、更新頻度の高い情報については、インターネットを介して情報の更新を自動化できるなどの手法も進められています。

一方、更新頻度が年1回など更新性の低いコンテンツについては、施設に常駐するスタッフが自ら更新できる程度の簡易な仕組みを検討する必要があります。

情報の内容に応じて最適な手法を選択することで、管理運営に必要な条件づくりにもなります。